

5 平田禿木のワイルド紹介

平田禿木(1873 -1943)は本名、喜一郎。東京で生まれた。一高在学中に上野の図書館でペイター(Walter Horatio Pater, 1839 -1894)の『文芸復興』(*The Renaissance: Studies in Art and Poetry*)を読んだと言われている。⁽¹⁾その時に印象は明治27年(1894)4月の『文学界』の「草堂書影 其——人心の幻境を論ず——」として掲載されている。禿木は『文学界』の副編集人的な地位にあり、イギリスの詩人、キーツ(John Keats, 1795 -1821)やランドー(Walter Savage Landor, 1775 -1864)などを初めて日本に紹介した。禿木は一高を中退するが、その後、改めて入学した東京高等師範学校英語専修科を卒業すると、附属中学校で教鞭を執った。そこで、フェノロサと会い、能の英訳を行ったのである。これはフェノロサとパウンド(Ezra Pound, 1885 -1972)共訳の『能』の訳稿となったものだ。その後、オックスフォード大学に留学中に島村抱月との親交を深めたが、明治39年(1906)6月に帰国した。禿木は留学する以前より、イギリスの詩人に早くから注目していたが、ワイルドへの言及は帰国後ということになる。

(1)「英国詩界の現状」

禿木は明治40年(1907)4月15日に新詩社社友大会に招かれ、「英国詩界の現状」と題する講演を行い、その内容は5月の『明星』(未歳第5号)に掲載された。禿木はこの講演の中でワイルド復活の契機を促した *De Profundis*(1905)との出会いを紹介しているが、おもに、ウィリアム・バトラー・イエイツ(William Butler Yeats, 1865 -1939)、ワイルド、ロバート・ブリジェス(Robert Seymour Bridges, 1844 -1930)の3人について述べている。全体的な流れに沿いながら、この講演の内容を紹介しておきたい。まず冒頭は以下の通りである。

イギリス詩界の近状についての話をとの事ですが、ただいま非常に忙しいので、これといってまとまった事は申上げられないのです。御承知の通り、イギリスには今いづれの方面においても大文豪、大作家とい者はみないのですが、さすがシェレエ、キーツ以来ブラウニングなどにおよんだ処の詩潮は、今もその流れの絶えないので、その趣味の味ふべきもの掬すべきものの少なくないであります。⁽²⁾

その後、スウィンバアン、キップリング、ウィリアム・アアネスト・ヘンレエ、アアサア・シモンズ、ロレンス・ピンヨンなどに言及した後、イエイツについて触れるのである。

アイルランドの詩人のイエイツと云ふ人が、しきりに世間の注意を惹くに至りました。この人はピンヨン氏よりはやや年長の方であり、詩集を出したのも余程以前であるが、何故急に文壇の注意をひくに至つたかと云ふとこの人が多年経営して居りましたアイルランド国立劇場と云ふものが段々と緒に着いて、この人と趣味を同じうする年少詩人や、営利的劇場に飽き足らない、文藝の素養ある男女の俳優がその部下に集つて来て、かつダブリン府において、規模こそ至つて小さくはあれ、ともかくもこの人人の団体のために自由に費用なしに使ふ事の出来る、「アベエ・シアタア」といふ、瀟洒とした品の好い一劇場を得るに云ったのです。⁽³⁾

根本の基礎をケルト民俗の伝統においていること、今は主にロンドンに住んでいるが、常にその祖国を忘れない詩人として紹介しながらも、

今の英の文壇、真に詩人らしい詩人を求むれば、ウィリアム・バトラア・言イエイツをおいて他に無いのである⁽⁴⁾

としている。その後はイエイツの戯曲について言及し、その中でジョージ・ムーア (George Moore, 1852 -1933) についても触れているのである。

ワイルドについては

一九〇五年春二月の頃 *De Profundis* なる異常な一本が英の文界を騒がせた。これは今は故人であるが、オスカア・ワイルドと云ふ薄倖な一詩人が獄中の日記のやうな物で、非常に一般読者界の愛読を得たのであります⁽⁵⁾

と紹介を始めている。ワイルドの簡単な生涯の紹介があるが、その中で次ような一節がある。

オックスフォード大学に遊びモオドレン学寮の人となつて、当時ラスキンなどを首として起こった審美的運動の影響感化に浴する事深く、ニューディゲイトの懸賞詩と云ふのがありますが、一夏イタリーに遊んで、詩聖ダンテが客死したラヴェンナの旧都を歌つて、かのニューディゲイト懸賞詩に当選しました。⁽⁶⁾

ワイルドが詩はもちろんこと、批評、戯曲などの創作にその才能を発揮してい

たことに紹介しながら、

私は『幽奥より』といふこの獄中の日記を読むにつれて、この人の詩はど
ういふ物であるかしきりに知りたくなった。、、、その詩集はどうしてもキー
ツで、自らキーツを歌つて、ポエット・ペエンタアである⁽⁷⁾

と述べている。その後は『ドリアン・グレエの肖像』(*The Picture of Dorian Gray*,
1891)について触れている。

種々な警句、パラドックスに富んで、極めて華やかな生涯が描かれてある。
氏の哲学、人生観のいては彼のウォルタ・ペエタアの感化を受くる事著しく、
真珠のごとき焰を燃やし、流れ動いてやまざる美的生活の深い人だけあつて、
悲しで破らず云ふやうな深い用意を備へて居る。⁽⁸⁾

禿木はワイルドへの言及については、最後にアーサー・シモンズの評を引用し
て結んでいる。

一度詩を作れば忽ちキーツの域に進み、一度戯曲に筆を染むれば、たちま
ちシェリダンの境を襲ひ、一度獄に下ればその瞑想のやがて心を衝くもの
あらしめ、小説において、批評において、到る処として可ならざるなく、
要はただその態度を改むるによつて、その豊富なる才を示し得ると云ふの
は、実に異常な才人といはねばならぬ、天才却つて身の累をなしたので
あるか、ワイルドのために惜しまざるを得ない。⁽⁹⁾

講演の全体は最後にロバート・ブリッジスについて触れているのである。こ
のブリッジスについてはキーツの研究を試みるなど、ワイルドにしても、イ
エイツにしても、その背景にキーツの存在を感じさせるものがある。

(2)「詩人オスカー・ワイルド」

禿木は明治40年(1907)4月15日の「英国詩界の近状」と題する講演のワイ
ルドの部分だけを加筆し、1908年(明治41)6月24日～26日に『東京二六新
聞』に「詩人オスカー・ワイルド」として連載した。ここでは特に、「英国の詩
界の近状」には記述されていない部分、つまり、加筆された部分を中心に取り
上げて行きたい。

6月24日の連載の冒頭にワイルドとの出会いについて触れている。

余が詩人オスカー・ワイルドを知に至った動機は彼が獄中の随筆録『幽奥より』(De Profundis)一篇を読でからの事である⁽¹⁰⁾

禿木は『幽奥より』をイギリス留学中に手にすることになったいきさつにふれているのである。禿木は *De Profundis* の出版によりまず「ワイルドの名声は忽ち復活した」⁽¹¹⁾ こと、「当年の文壇思想界に於ける自分の地位は身自ら既に一個の象徴であった」⁽¹²⁾ など、作品中からの引用も紹介し、*The Picture of Dorian Gray* の出版状況も取り上げたのである。

6月25日の連載ではワイルドの生涯に触れ、アイルランドのダブリン生まれであること、両親のこと、オックスフォード大学在学中のことが紹介されている。

6月26日の連載では、*The Duchess of Padua*, *An Ideal Husband*, *A Woman of No Importance*, *Lady Windermere's Fan*, *The Importance of Being Earnest* などの戯曲についても言及されている。裁判・入獄・出獄について触れているが、

彼の作物の中には詩と、小説と、戯曲の三種を有して居るが其の中で最も秀て居たのはやっぱり詩であろうか⁽¹³⁾

と、紹介した。詩人としてワイルドを扱い、キーツにつながる詩人として指摘したことは注目に値する。明治41年(1908)8月の『趣味』(第3巻第8号)の「文芸界消息」では禿木が *De Profundis* の翻訳にとりかかっていることが紹介されている。実際に出版されたのは、大正9年(1920)11月の『新生』のタイトルでアルスより出版された。

(3) 矢野峰人「禿木とワイルド」

「平田禿木とワイルド」については昭和26年(1951)6月の矢野峰人「禿木とワイルド」(『海潮音』第1号)がよい参考となる。同論文は昭和31年(1956)3月の矢野峰人『比較文学』(南雲堂)に収録された。矢野は禿木の「英国詩界の現状」「詩人オスカー・ワイルド」を取り上げ、特に『獄中記』に注目している。矢野は、

ワイルドにキーツの面影のある事を指摘し、詩・劇・小説の三種に互る彼の作中最も秀でたものはやはり詩であらうかと言って居るのは値する。⁽¹⁴⁾

と、キーツへの影響について言及しているのである。さらに、矢野は大正2年(1913)に『英語世界』誌上に連載された「英文学講話」で『獄中記』の誤訳問題を取り上げたあと、禿木について次のように述べている。

彼が如何に深くワイルドを愛して居たかは、彼がこの詩人がまだ牛津の学生時代、懸賞募集に応募して入選した『ラ　ンナ』の初版本を秘蔵して居たり、彼の詩を相当多くわざゝ筆写して居る事実等に徴して明である。これは、年少キ　ツを愛好し、ペイタ　傾倒した彼としては、自然の発展と言ふべきであらうが、いづれにしても、ワイルド移入史上、禿木の占むる位置が極めて大なる事を、われわれは記憶すべきである。(15)

平田禿木のワイルド受容の大きな特徴は、キーツへの影響を取り上げたことだ。詩としては「ラ　ンナ」に注目したと言ってよいだろう。「詩人としてのワイルド」を取り上げた文学者はこれまでもいるが、「詩人としてのワイルド」に最初に注目し、キーツとワイルドについて論じたのは禿木が最初であったと言っていいかもしれない。

参考資料

- 井村君江「日本におけるオスカー・ワイルド——移入期(第1部)」(『鶴見女子大学紀要』第7号、鶴見女子大学、1969年12月)
- 島田謹二・小川和夫監修／平田禿木『平田禿木選集』全5巻、南雲堂、1981年3月～1986年10月)
- 山田勝編『オスカー・ワイルド事典』北星堂書店、1997年10月
- 佐々木隆「明治時代のワイルド受容」(『武蔵野短期大学研究紀要』第13輯、武蔵野短期大学、1999年6月)

注

- (1) 矢野峰人「平田禿木」(新潮社辞典編集部編『増補改訂新潮日本文学辞典』新潮社、1990年4月)、p.1037.
- (2) 平田禿木「英国詩界の近状」(島田謹二・小川和夫監修／平田禿木『平田禿木選集』第2巻、南雲堂、1982年3月)、p.360.
- ＊初出の『明星』(末歳第5号)では「英国詩界の現状」となっている。
- (3) Ibid., p.363.
- (4) Ibid., p.364.

- (5) Ibid., p.365.
- (6) Ibid., p.366.
- (7) Ditto.
- (8) Ibid., p.367.
- (9) Ditto.
- (10) 平田禿木「詩人オスカー・ワイルド」(『東京二六新聞』1908年6月24日)
- (11) Ditto.
- (12) Ditto.
- (13) 平田禿木「詩人オスカー・ワイルド」(『東京二六新聞』1908年6月26日)
- (14) 矢野峰人「禿木とワイルド」(『比較文学』南雲堂、1956年3月)、pp.63-64.
- (15) Ibid., p.64.